Part 3 新商材動向

関心集める携帯型無線IP電話 データ統合効果をどう出すかが課題

オフィスへの無線LAN提案で今後クローズアップされるキーワードはVoIPだろう。

IP電話サービスは個人向け企業向けを問わず急速に広がっており、年内には「050」番号での電話網からIP網への発着信も可能になる。コスト削減効果を狙った企業におけるIP電話への移行はかなりの勢いで進むと考えられる。

IP電話の導入メリットは一部外線通話だけでは不十分であり、拠点間を結ぶ内線網全体のIP化、そしてオフィス内のオールIP化、VoIP化を達成してこそ本来の効果が上がる。つまり、企業ネットワークのトータルを音声通話のみならずデータ通信、Web、業務アプリケーションなどすべてIPアプリケーション統合することで本来のコスト削減と業務改善効果が実現できるのだ。そこで、無線LAN検討ユーザーから「無線LANインフラ上でのデータと音声の統合」というニーズが浮上してくることになる。

ここで注目を集めているのが、オフィス内のどこでも利用が可能な携帯型の無線LAN対応IP電話端末（ワイヤレスIPフォン）だ。ノートPCに無線LANカードを挿して、どこに出かけても自分に掛かって来た電話を受けられるというメリットをさらに簡便に提供しようというものだ。また、人事異動に伴うオフィス内線電話の工事費不要という面からもインパクトを持っている。

パート3では、既存の構内PHSに代替するものとしても注目されているワイヤレスIPフォンの製品動向と、普及への課題について追ってみる。

電話機能とセキュリティを充実

ワイヤレスIPフォンは、今年4月末にシスコシステムズが米国本社で製品を発表したのを契機に大きくクローズアップされた。

シスコシステムズの「Cisco 無線IP電話 7920」は、6月から国内でも販売を開始している。

IEEE802.11b規格に準拠し、呼制御プロトコルには独自のSCCP（Skinny Client Control Protocol）を採用。発信者＆発信番号表示やリダイヤル、不在者転送や三者通話等、電話機能も充実させている。

7920の開発でシスコシステムズが特にこだわったポイントは、「セキュリティ対応」だ。大金部長は、「携帯電話機の形をしているから、どうしても電話機能の充実が重視される。もちろんそれも大切だが、これは無線LANの端末であり、セキュリティをおろそかにするようなことはあってはならない」と強調する。7920は、40ビット、128ビットのWEPに対応したほか、IEEE802.1x、そして独自の認証プロトコルである「LEAP（lightweight extensible authentication protocol）」も搭載し、より強固なセキュリティを実現している。

国内ベンダーで先鞭を付けたのは、富士通アイ・ネットワークシステムズで、6月下旬に「Wireless IP

REPORT

無線IP対応でボタン電話を活性化

「IPstage」で業界に先駆けてオフィス内のVoIP化を図ってきた沖電気工業は、「ボタン電話機市場をもっと伸ばしていきたい」（IPソリューションカンパニー・エンタープライズビジネス本部マーケティング部の大川精二シニアマネージャ）という意向から、無線IP電話端末を収容するビジネスホンシステムを開発し、無線LAN対応IP電話ソリューションとして提供を始めた。

同社が9月1日から出荷を開始した「IPstage SS10」は、データと音声を無線LAN上でIP統合したルーター内蔵のビジネスホンシステムで、SS10とPCを接続することで、小規模オフィスにLANと電話を一元化したワイヤレスネットワーク環境を実現する。

また、同社の公衆IP電話サービス用アダプター「IPstage VC12R-BRI」を組み合わせれば、ISP各社がADSL回線ベースで提供する「050」サービスを利用することができる。

無線IP電話端末は、ビジネスホンの使い勝手を生かした無線IP多機能電話として利用できるほか、PCと接続することでデータ通信用の無線LAN端末としても機能する。

携帯型端末への対応は、ユーザーニーズを見据えながら検討していく方針だ。その際、ポイントとなるのは、「低価格化と通話時間の延長」（同マーケティング部プロダクト第二チームの川上泰弘チームリーダ）という。

IPstage SS10